

第6回門真市魅力ある教育づくり審議会

(第4回子どもの学ぶ意欲向上部会) 議事録

開催日時 平成29年11月7日(火) 午後3時10分～午後4時10分

開催場所 市役所別館2階 第1会議室

出席者 新谷龍太郎、片山仁、川村早余子、上甲尚、中川智広

事務局 満永教育部長、寺西教育部総括参事、中野教育総務課長、杉井学校教育課参事、向井学校教育課長補佐、永田教育総務課主査

傍聴者 0人

議 事

新谷部会長

それでは子どもの学ぶ意欲の向上部会を開催させていただきます。まず事務局の方から部会での議題について説明していただければと思います。

中野教育総務課長

それでは改めましてよろしくお願ひいたします。資料4のほうの門真市魅力ある教育づくり審議会の今後の流れ(案)をご覧ください。今回の部会では子どもの居場所づくりの推進、及び自分の将来を描ける力の育成について議論をしていただきたいと思いますと考えています。子どもの居場所づくりの推進については、門真市教育振興基本計画の39ページの現状と課題で、「どの子どもも多様な体験活動を行いながら自尊感情を育み安全安心に過ごせる場所を確保することが求められています。」とされております。また自分の将来を描ける力の育成については、同計画の15ページの方で、今後の方向性としまして「主体的に進路を選択して社会人として自立するために必要な基礎的資質能力を育成します。そして生涯にわたって学び続ける意欲の向上を目指します。」となっております。主な実施事業④では、経済面等により進学が困難な生徒を対象として、「すべての子どもたちが進路選択の機会を等しく持てるよう専門相談員による進路選択支援事業を実施します。」とされております。計画上は2つに分かれておりますが、

密接に関わる内容でもありますので、討議の柱といたしまして、まず①として、子どもが多様な体験をできるような居場所のありがたについて議論をしていただきまして、次に②として、自ら進路を切り開くために必要な力とは何か、主体的に進路を選択できるようになるための意欲を高めるための方策は何か、について議論していただいた上で、最後に門真市奨学金の現状につきましても、ご議論していただきたいと考えております。この内容を元として、自由に議論をしていただきたいと考えております。また議論していただくお時間ですが、先ほど説明ありました 16 時をめぐりに議論していただきまして、そのあと残り 10 分で意見を集約していただきまして、16 時 10 分にはこの部会を終了しまして、5 分の休憩の間にまた第 3 会議室にお戻りいただいて、16 時 15 分の全体交流のスタートをしていただきたいと思っております。こちらからは以上です。

新谷部会長

はい、ありがとうございます。では、イメージとしては子どもたちの足元の居場所を固めて、進路の話をして、それをサポートする奨学金の話をする。これを 50 分位ですするという事ですね。よろしくをお願いします。

ではまず、子どもが多様な体験ができる居場所をっていうことなんですけれども、先ほどパワーポイントで説明がありました、保護者の社会環境っていうことですかね、子どもの生活に関する実態調査という、せっかくまとめていただいたので、何かご覧になって皆さんの印象というか、ご意見を。

川村委員

ずーん。

新谷部会長

ずーんですか。どんなところがずーんですか。

川村委員

いやもう、全てにおいて門真どうなってるの、みたいな。何なんですかね。子どもの意識なのか親の意識なのか。何なんでしょう。

新谷部会長

どのあたりで感じられましたか。

川村委員

うーん、なんか。

新谷部会長

僕もこう、頭から追って行って、最初、保護者の調査から見ると8割位がある程度されてるっていう感じがするんですけども、一番気になったというか、自分も困るなあというのが、2ページの体調が悪い時に医療機関に連れてってくれるという、大阪と同じ位なんですけれど、働いていたら結構大変ですよ。休んだら仕事切られちゃうかもしれないです。留守頼めるっていうのも、身近におじいちゃんおばあちゃんいなかったら結構大変かなって思うんですが。片山副部会長どうですか。実態としまして。

片山副部会長

以前より時折お話しはさせてもらっていますが、門真市における「ひとり親家庭」の問題が一部現れているのではないかと思います。

大阪府との比較において、その差がどれぐらいあるのかも気になるところです。どうしても、お母さんだけとか、お父さんだけしかないという場合には、他に頼れる人のいないことが考えられます。特に、留守を頼める人は、ほとんどいないのではないかなと思います。

新谷部会長

そうですね。本当に。この3ページの大阪府と比較しても5ポイントぐらい、孤立しているのではないかということがわかるような数字ですね。学校の先生から見て、そのあたりのしんどさみたいなものを感じることはありますか。

中川委員

いや、まさしく今おっしゃったように、困ったときの相談先のトップが、府との比較で職場の関係者というのがもう現れている。それこそやはり配偶者であったり、パートナーっていうのが不在で、どうしてもやっぱり生活するために働きに出ないといけない。すると職場での過ごす時間が長いので、そういう話し相手も職場の関係者になるんだなあというのが、如実に出ていないかなあというようなところで、あーこんなに出るんだなあ、というのがびっくりだし、納得だしというところで。本当に、授業参観なり懇談なり何とか時間を作ってきてくださるんですけど、やはり行事であってもこの時間だけ抜けてきましたとか、うまいこと合わせて来てくださる保護者の方がたくさんいらっしゃるの、とにかく、パートを2つかけ持つてはる保護者の方がいらっしゃるの、特に僕たち目の前にいる子どもたちの保護者が目に浮かぶので、こういうことやろうなということが。はい。

新谷部会長

なんか一方で、結構友達に相談するのが高かったりするんで、そこしかないから相談するんだと思うんですけども、助け合うクラスとかね、友達関係もあるのかなっていうイメージがあるんですけども。中学校の学級経営でそういうのを意識されたりしているんですか。助け合いとか。

上甲委員

その辺はね、集団づくりとかそういうのは常に意識して、つながりはね、作っていくようなところへんはいろんな活動の中でみんな意識していると思いますけど。いろんな行事とかも含めて。

中川委員

今までも話してきましたが、特に中学校、担任教師が教科ごとによって変わっていくけども、子どもたちは同じ空間で過ごしている時間が長いからこそ、子どもたちとの関わりをしっかりとつなげていくっていうのが、いろいろ頭に思い浮かべながら、行事もそうですし、普段から考えておりますけれども。

新谷部会長

あの、ちょっと気になったのが、なかなか担任の先生に相談する割合が少ないっていうのがあって、これはどちらかというと、先生が忙しすぎて捕まらないとか、なんかそんな様子も思い浮かんで、本当は相談したいけど、今相談したら先生忙しそうだなとか。何か、どういう風に数字見られましたか。担任や他のクラスの先生に相談するっていうのが、大阪は 13%で門真が 9.3%なんですけれども。

上甲委員

これもね、我々教師としては少し寂しい数字だなと思います。

川村委員

厳しい意見かもしれないですけど、いやなことや悩んでいるときの相談相手に友達がとても多いのですが、不登校とか長欠が多いっていう事は、結局相談するのは友達だけど、親身になって答えてもらえないから、なかなか解決しなくて、学校行けないのではないかなと思うのですが。

だから、学校に行っても、先生たちにも相談もできないというか、したくないから、やっぱり行きたくないのかなあとか。

そういった背景も、もしかしたらあるのではないのでしょうか。今ふっとそう

感じました。ところで、この実態調査って、毎年されてるんですか。

新谷部会長

去年だけですか。

川村委員

過去にもないんですか。

上甲委員

ここまで大掛かりなのはなかったと思いますけどね。

川村委員

昔と今との生活環境が変わってきたからのこのデータなのか、もともと門真がずっとこういう傾向にあるのか、私、保護者の立場でお母さん達としゃべっていたら、やっぱり 10 年前のお母さんたちが話している内容と、今のお母さんが話している内容は、やはり違うのです。

つながりということも、希薄になっていると思います。

厳しく言ってしまえば、あまり協力的ではない発言が増えているように感じてしまうのです。

そういった部分も、先ほど示されたデータに現れているのかなっていう気もするし、何がどうっていうよりも、まず何か、子どもの周りに頼れる大人がいないのでしょうか。

親にしてもそうだし、先生たちにしてもそうだし、子ども達と親身になってもっと引き上げてやれる要素って、何なのだろうというところに行き着いてしまいました。

中川委員

先ほどの、あなたのことを信じてくれる人について、友達と答えた割合が府平均より少ない、友達に相談するけれど、信じてくれる人は友達の割合は少ないってというのは、それこそ本当に、相談はするけど、どうなんだろうって思います。

相談の仕方もこの 10 年で考えるとやっぱり、面と向かってじゃなくて LINE とかで、こう言って返して、みたいな感じで、あんまり重くなっていないのかなあというのも一つあります。この何年かの差っていうのであれば、SNS の普及があまりにも急速なので。

新谷部会長

なんか今回報告をしっかりとさせていただいて、一番気になったのが、今おっしゃった「信じてくれる人」のところと、「大切にしてくれる人」っていうのが、他の項目は何かどっかで、府の平均を上回っているところがあるんですけども、この2つだけ全部多分下回ってるんじゃないかな。

誰もいないっていう所以外。

それで、自己肯定感が低いっていう要因も、このあたりの事情と関係している気がします。

別に誰でもいいのですが、信じてくれたり大切にしてくれる人が、もっと周りにいると良いと思います。

私の知人が保健の先生をしてるんですけど、やっぱり最近怪我じゃなくて心の方で来る子どもが増えているっていうことを言いますね。

片山副部会長

うちの子も同じ様なことを言っていました。

新谷部会長

ああ、そうですか。

片山副部会長

中学生の時、担任の先生に相談するよりも、保健室に行って保健の先生に相談することが多かったみたいです。

新谷部会長

スクールカウンセラーは週に1回程度しか来ないから、なかなかずっと入っていけなかったりするんですよ。

片山副部会長

結局、親も先生も、子どもから見て、余裕がないのではないのでしょうか。

新谷部会長

そうですね。余裕がないと思います。

片山副部会長

子どもからすると、先生にも親にも声をかけにくいというか、相談しにくい、そういうオーラを大人がまとっているのかもしれないですね。

新谷部会長

おそらくそうでしょうね。本当にこう、子どもが何か横から言ってきて、きちんと体を向けて話を聞くだけの余裕があるかどうかという、ついつい横で聞いてしまう。親も忙しいですから。

片山副部会長

学校の先生も、特定の生徒だけに向き合っているわけにはいかないですから。

新谷部会長

本当に様々なことで一生懸命走りまわっていたら、今1人の子どもに20分の時間をとると、他のことがどうなってしまうかということが、頭をよぎってしまうのではないのでしょうか。学校の中に、他に生徒の話をゆったり聞く存在って、いらっしゃるんですかね、中学校では。

上甲委員

カウンセラー、養護教諭、担任、それ以外はいないなあ。

中川委員

そうですね、それこそ先ほど言っていた通り、スクールカウンセラーの先生は週一回ですし、予約制なので、もう予約もいっぱい、来週あかんから、再来週のここならとか。

上甲委員

カウンセラーさんは1日6時間勤務なのでね。

新谷部会長

そうですか。それでは全く捌けないですね。

上甲委員

もう予約が入ってたりとか、保護者の予約が入ってたりするので、ぱっと、空いてたから行きたいっていうのがなかなかできないですよ。

新谷部会長

多分、あと今おっしゃいましたけど、親御さんも、本当は相談したいことがあると思うんですけれどね。

上甲委員

仕事持っていて、昼間来られないとかね。

新谷部会長

夜は疲れて行く気にもなれない、土日は子どもの世話をしないといけないという。何かこう、中学校の方で地域とか保護者の方で、意識的に集まり持ったりする機会はあるんですか。

上甲委員

地域とですか。

新谷部会長

地域とか保護者とか。接触する機会は。

上甲委員

地域には地域の集まりがあって、そこに保護者代表のPTAの役員さんとかは、顔出したりとかは、青少年育成協議会とかね、そういう名称の集まりがあって、学校の様子を交流したりとか、子どもとイベントを考えたりとか、そういう機会はあります。そんなに頻繁ではないのですが。後は学校の行事に案内状出して来てもらうとか、そういう程度の事はしますけれども。

片山副部会長

何か企画をしましても、保護者の参加意欲があまり感じられないので、企画する意欲も削がれてしまいます。

新谷部会長

そうですね。

中川委員

そして、行きたい人がいるかもしれないですけども、やっぱり仕事との兼ね合いがある場合は、逆に私自身も、自分の住む地域に自分の子ども連れて行けたらいいなあという日に、部活動の試合があったら、やはり試合の引率を優先します。子どもにはごめんねと言いながら、おじいちゃんかおばあちゃんに連れて行ってもらうこともありますから、どちらの立場からしてもなかなか、痛しかゆしというか。

片山副部長

そうですね。

新谷部長

前もご紹介したかもしれないですけど、アメリカの貧困地域などでは、朝ドーナツだけ食べる会があったりするんですよ。7時頃から集まって、仕事のないお母さんなんかはそのままだってたりするんですけど、日本はあんまり朝に集まる習慣がないから、何かね、子ども食堂じゃないけど親子食堂みたいな、晩ご飯一緒に食べる会なんかあってもいいかなと思うんですけども。

中川委員

それは今その、本当にご飯を子どもたち1人で食べてたり、それから兄弟だけとか、で、ほんまに相談するのが兄弟っていうのも、その場にいるのがね、親御さんがやっぱり仕事遅なるからっていう形で、作り置いたものを兄弟だけで食べたり、もしくは、材料だけがあって、作っというとか、今日はちょっと時間なかったからこれで何か買ってきてねとか、というようなことを子どもからよく聞くんで、その、ご飯を食べるっていうだけでもね、本当に何かあるといいかもしれないですね。

新谷部長

大事ですよ、やっぱりご飯って。あの、私の師匠が「つながり格差」っていうことを言っていたんですけども、この状況を見ると、やっぱり孤立してるお母さんっていうか、親御さんたちこそ、多分もうちょっと手厚いつながり支援みたいなのが、必要なのかなっていうふうには思いますね。わかりました。えっと、多様な体験が出来るような居場所っていう事ですので、単に居場所だけじゃなくて、他にいろんな人が入る場みたいなことも討議する必要があると思うんですけども、中学校の中で、地域の人たちが集まったり、先ほど話がありましたけれども、地域の人材を生かした取り組みなんかは、中学校の中であったりするんですか。

上甲委員

私の学校では保護司の方々をお招きして、私立高校入試が2月10日前後にあるのですが、それに向けて中3対象に面接練習をしていただいているのです。教員ではなく、地域で活躍しておられる保護司の方々に模擬面接をやっていたくことによって、子ども達も緊張感をもって練習ができるんですよ。

新谷部会長

へえ、それは面白いですね。

上甲委員

初対面ですから、生徒たちに緊張感が出るし、いいですよ。すごく。教員がやるとちょっと緊張が緩んだり、にやけたりしたりするんやけど、あれはいいと思いますね。

保護司の方々は、自分達も良い勉強になるって言ってくださり、本当にありがたく思っています。2日間、10人ずつぐらいの保護司の方が来校してくださり、実に意義のある取組であると思っています。

新谷部会長

中川先生とかどうですか。

中川委員

私の学校では吹奏楽が盛んなので、逆に地域で何かイベントを行うとなると、よくご依頼をいただいて、そこに応じた演奏をして、といった形で、出張で行く事はよくあります。逆に来ていただくということは、部活動の指導という形で五中の卒業生の方が来てくださったりしています。今、面接練習も面白いなと思いつながら聞いていました。

新谷部会長

前も話題に出たのですが、大学生の方が入るとかっていうのは、どうなのですか。学習サポーターみたいな形で。

上甲委員

それはあります。

中川委員

それこそ、サタスタです。サタスタに来てくれていた子が、今回、教育実習で来てくれたりしています。

上甲委員

自分の学校の卒業生で組織できたら一番いいんでしょうね。市の事業で、学生に募集かけて、不登校の対策学生フレンドとかね、そういうので来てもらって、不登校の子に関わってもらったりとか、そういうのは大学生にやってもら

っています。

新谷部会長

その卒業生の組織って、やっぱり難しいのは、誰がするかっていう話ですか。

上甲委員

そうですね。

新谷部会長

離れてしまっているとか。

中川委員

知ってる先生方はやっぱり転勤をしてしまうので、声をかける子たちが違うという。

上甲委員

学校の窓口はやっぱりどうしても管理職になっちゃうんでしょうけど。そうなる。

新谷部会長

窓口が不安定なんですね、そうなる。

川村委員

地域から声をかけたとしても、結構大学生、行った先でバイトしてたりとか、まなび舎サスタスタとかにも、母校に帰ってきてよと、声かけ私も大概するんですけど、いないんですよね、この界限に。来て欲しい時間帯には、外に出ててっていうのもある。

新谷部会長

なるほど。

上甲委員

教育実習何かでね、来る子なんかもう、4回生になっているので、実習が終わったらもう就職活動やら何やらで忙しい。卒業も控えており、そこからは広がらないですね。後輩の紹介をしてもらえられれば、一番いいんでしょうけどね。

新谷部会長

そうですね。実際うちの大学でも、なかなかボランティアを集めるのが難しいですね。集めてもまた継続させるのも難しいですからね。なかなかちゃんと事業としてやらないと、これは難しいですね。

次の話題は。あとちょっとこの多様な体験の居場所というところで、関係する情報提供なんですけれども、ちょっとデータをいただいて、門真市の全国学テの状況調査を、分析させてもらったんですけど、小学校の方では学力と相関が高かった項目として、図書館資料を活用した事業とか、地域等の外部支援の活用、地域や社会で起こっている問題や出来事を扱うとか、地域や社会を良くするために何をすべきかっていうのが、相関高いんですけど、これが低かったっていう結果がありました。家族の関わりとか計画性っていうのがあるんですけど。これは擬似相関って言って、ちょっと間違った関係かもしれないけど、地域にそういう関心に向けられたり、調べ学習とかができる基礎学力のある学校だから高いっていう可能性もあるんですけど、ちょっとその辺はわからないんですけど、そういうのと関係しているっていう内容があったり、ただ規範、決まりを守るとか、授業の目当てと振り返りを徹底するっていうのは、学力と相関が高いっていうのと、中学校ですと運動部が文化部、どっちかに参加している生徒は、参加していない生徒よりも学力が高いと。でもどっちとも参加している生徒が一番学力が低いっていう、結果になっています。

部活動が大体1時間前後のところが一番高くて、3時間超えると最も低かったんです。いずれにしても地域への関心とか、ニュースを見るっていうのは、かなり学力と関係しているところがあるので、居場所づくりの時、やっぱり地域との関係性っていうのは、考えていかないといけないところかなあというふうに思いました。情報提供です。

では次に、自ら進路を切り開くために必要な力、主体的に進路を選択できるようになるための意欲を高める方策ということなんですけれども、これもデータ少しありますかね、先程の。大学進学データの。

子どもの大学進学希望が、大阪が39.6%、門真が32.2%、保護者に聞くと、大阪62.7%、門真市が49.1%で、保護者も、希望する割合が低いのは経済的要因じゃないかみたいな話がありました。

大学進学ばかりが、良いとは思わないかもしれないんですけど、大学に進学することで、社会的には、就職とかにも結びつきやすいと言われていいますので、検討すべきかなと思います。

3週間ぐらい前に児童養護施設に実習関係で行ったんですけど、なかなかすぐに進学っていうふうには行かずに、クールダウンさせるっていう指導が、まだ根強く残ってまして、ていうのもやっぱり、なかなか何となく進学するより

かは、なんとなく就職した方が生活は安定するかなっていうふうなことらしいんですけど、多分この門真市の保護者の方にも、大学に進学することのメリットっていうか、あんまりイメージできないんじゃないかなあっていうのもあります。

以前大阪で学力格差に関する調査をすると、やっぱり子どもの進学意欲とか学力と関係するのは、保護者が計画的に、大学進学のための資金計画を作っているかどうかというのが、結構影響していて、収入の高低よりも計画性の有無があります。

しがたって、子どもの進学意欲を高めるということは、親の計画性であったり、大学進学への理解であったりがなければ難しいでしょう。ところで、中学校で進路指導される時は、どんなことを話されるのですか。

中川委員

それこそ今までも言っていたかもしれませんが、やみくもに勉強しろって言っても、全然意欲もなければ勉強してもやっぱり身に付きません。

はすはな中学校もそうですが、大学の見学です。これまで高校見学に行くということは中学校で行っていますが、大学を見て、やっぱり好きなことを極めているというかね、先生方の話を聞く中で、やっぱり勉強って楽しいよな、好きなことをしているって、新しいことを知るって楽しいねんやなっていうことを、伝えていきたいと思うのです。

学ぶということはどういうことなのかということの一つテーマにしながら、中学校を出てすぐ就職するという生徒もいるのですが、はせめて、高校のいろんな勉強、本当に社会体験も含めて、考えさせたいです。さらに、その先には大学、それもいろんな学校があるんだよという話はします。

けれども、保護者の中でも、私立高校の説明会に行ったら、「大学進学実績のことしか話さないけど、この学校に行って就職はあるんですか。」と私に聞く親もいます。高校の先生に聞いてほしいところですが、私からも、私立高校さんでも就職されている方いますよとか、公務員試験受ける方もこれだけいますよというような話をします。こうした保護者の意識が子どもに伝わると、別に大学行くよりかは高校行って、就職して、という気持ちになりますね。

大学のことも考えて、それこそ保護者の中で公立行けたらいいけど、私学行くんやったら、大学の付属の高校に行けば、そのまま上がれますかね、というような、そういうような話が、毎年のように聞かれるので、保護者の意識って大きいかなあと思うんですけども、学校ではやっぱり、学びについてはいろいろ伝えてはいるのですが。

新谷部会長

あの、またアメリカの事例で申し訳ないんですけども、アメリカって、進路専門のカウンセラーがいるんです。奨学金も含めて、いろんな情報を一定そこで集約して、いろいろ、特に親が大学に行っていない子どもに対するサポートをするんですけど、公立の学校の先生って、そんなに専門的にずっとやってらっしゃる方、いるのかもしれないですけど、来年は進路担当だからよろしくねみたいな感じで、そのあたりの進路専門の育成というか、進路担当する先生の専門性っていうのは、どのように育成されていくんですか。

上甲委員

1回やるとその人は進路担当、3年所属になったらやるというイメージはありますね。それで、進路担当をやる先生は、大体固定化されているような学校もあります。その先生はあまり担任を持たず、進路担当をずっとやるとか、3年になったらやるとか、いろんなパターンがあります。中川先生は進路のエキスパートです。

新谷部会長

エキスパート、そうですか。

中川委員

今、大阪府立高校の入試制度が、めまぐるしく制度が変わっています。それで、子どもたちも教師も大変なので、なぜかずっと進路担当を今、しばらく担当している状況で、そういう方が、市内にも数名、全中学校っていうわけじゃないんですけどいます。その中学校は2年連続、その先生という形です。

新谷部会長

あーそうですか。そうですね。やっぱり大学進学、高校進学、あと生活保護を受けるのも何でもそうですけども、情報とか制度はあるんですけども、本当に必要な人にそれが届かないっていうのがあったりすると思うんです。

多分進学、先程の奨学金の話もそうですけども、本当は使える制度があるけれども、それがちゃんと橋渡しできないっていうか、橋渡しするための余裕もないとかっていうのがあったりするんですが、なんかこう先生のご経験の中で、特に家庭がしんどい子どもの、特に大学進学に関して、こんなエピソードがあったとかって何かありますか。

中川委員

大学進学。

新谷部会長

あんまりそこまではイメージしてないですか。

中川委員

本当に、しんどいところでは、それこそ奨学金であったり、子どもを通じて、書類を配らせてもらうんですけど、カバンの中に入れっぱなしであったりとかで、親御さんもお仕事で忙しくてあんまりそういう話がなくて、締め切り間際に、「先生奨学金のことで、どうなってますか」って問い合わせがあるということが多々あります。

やはり保護者集会をしても、その時間帯抜けて来られる方も、何とかいらっしやるんですけども、やっぱり全員が全員来られるわけでもないですし、欠席された方にはもちろん資料は、ただやっぱりこれも子どもを通じてになりますので、本当に伝わっているのかなっていうのが、三者懇談で確認をするであったり、「ご覧になってますか」とかっていうようなことで。

新谷部会長

見てもわかんないんですよ。またあの資料が結構難しいので。

中川委員

そうなんです。

川村委員

進路指導で思い出しました。門真の進路指導は、私は遅すぎると思います。子どもたちに、なぜ学ぶのかということを考えさせることも大切ですが、その先にある高校受験に向けて、大阪府内の他市でも、学力の高い所なんかは、中学校1年生・2年生から、保護者懇談したり、「自分どこの学校に行きたいの？」という問いかけがあるとかないとか聞くのですが、私の子どもに関しては、1回もありませんでした。

下手したら3年生になってから「どこ行くの？」って言われてもね。もっと早い段階での声かけをしてほしいです。

私は大阪ではないので、大学は出ていますが、大阪の大学じゃないので、大阪の大学もわからないし、そういう意味では保護者も、本当に意識が低くて、学力もあって、ある高校でトップクラスにいる子ども、先生に大学推薦を勧め

られても、専門学校に行くんですよ。

専門学校でいいやん。お金は同じくらいかかる、いや、それやったら大学にまず行ってみたらいいんじゃないっていうけど、大学行っても仕方ないし、専門学校で手に職をみたい意識もすごいある。

けれども、その子どもが中学校入ってすぐに、もっとう、受験に直接結びつかないにしても、大体学校でこのぐらいの点数を取ってたら、このぐらいの学校を目指せるんだよっていう、そういう目に見えて分かるものを提示した上で、子どもたちに、何になりたいの、じゃあこの学校行けたらいいよな、そのためには自分は何点足りないよな、それを3年生の受験までに補おうよとか、頑張ろうよ、っていう声かけを私はすごくして欲しくて、結構言ったこともあるんですけど、あんまりそういうのがない。

でもそこが本当は大事なのではないでしょうか。そうでないと親の意識も変わりません。受験間際になって、行くところない大丈夫かなということにならずに、もうちょっと余裕持って、受験に臨ませることができるかもしれません。

そういう意味では、本当に欲しい情報っていうのが、先生が与えたい情報と、親が欲しい情報っていうのが違うのかもしれないし、子どもの学びに結びつく情報っていうのも、違うのかもしれないし、なんかそこがもうちょっとうまくマッチしてくると、もしかしたら門真の子どもたちの学力も、高校受験に対する意識もぐんと上がると思います。

中川委員

今でも、1年生の頃から内申が入るように、この3年生からなりましたし、2年前、チャレンジテストっていうのが入った関係で、チャレンジテストの説明であったり、それこそ入学して、次の提出物出す時から、内申点が入試に直結することになりましたので、2・3年前から、入試制度の変化が激しかったので、各校説明の時期は早くなっていると思うのですが。

川村委員

早くなった記憶はあります。

上の子は今高3で、下の子は高1なんですけど、やっぱり早かったと思います。受験の説明は。

でも、それは私の欲しかった情報かというところと違うのです。どれだけの成績ならば、どこの高校なのかという情報です。うちの子が北野高校行くと行って言ったら行けるんですか、といった情報です。うちの子、どこの高校に行けるのだろうということがわからないと。おそらく保護者も進学に対する意識は高くないのかもしれないと思うんです。

高校受験とか大学受験とか。そこをもっとこう、直接に結びつけるには、あなたのお子さんは今このレベルですといったことも明確に示す必要があると思います

つまり、もっと保護者の方々に進学ということを意識させるアプローチって大事なんじゃないかなっていう気はします。

上甲委員

何点取ったらどここの学校まで、なかなかいろんな絡みがあって、出しにくい部分もあるんですけど、進路の意識とか自分の将来を描くイメージを早く身に付けるという意味では、うちの学校では中2の段階で、進学フェアという行事を行っています。

2学期の中間テストの最終日に、今年もやりましたが、17校の高校と専門学校の先生に来てもらって、体育館でブースを設けて、中2は全員参加します。1年生と3年生は自由参加です。

生徒たちはブースを3つまで選べます。17校のうち3つについて、あらかじめ希望をとっておいて、10分ずつの説明を順番に回っていきます。生徒たちは楽しそうに、そして真剣に聞いています。しっかりとメモをしながら、パンフレットもらったりする子もいます。

工業や商業やいろんな高校、公立・私立様々な高校をお招きしますが、2年生は全員参加にしているんです。9月に本校では2年生が職場体験に行き、10月に進学フェアに参加するわけです。そこで職場体験で芽生えた気持ちを進学への意識付けへと高めていくことがねらいです。

保護者は自由参加ですが、今年度は1・2年生の保護者の方々が100名程度来場されました。そのことも良かったと思います。

1年生の生徒は自由参加でしたが、半数は参加していましたし、3年生は昨年度参加していますが、それでも半分以上の生徒が参加していました。

川村委員

触れるってすごくいいですね。

上甲委員

実際に高校の先生が来てくださり、パワーポイント等の資料を使って工夫しながら説明してくださいました。生徒たちにとっては、学校内でそのような体験ができるということで好評でした。

新谷部会長

なんかこう、主体的に進路を選択できるようにって書いてるんですけど、だから、大学行くか行かないかは別として、もともと選択肢として狭めた中で選ぶのか、いくつもある中で知ったうえでやっぱりこれを選ぶのかってなったら違うと思うので、以前中国地方の高校で、東大進学者がたくさんいる高校だったんですけど、なんでこんなに東大進学者が多いんですかって言ったら、高校1年生の時から東大っていう選択肢を誰にでも与えているからだそうです。

要するに母数が大きいから、必然的にそこを選ぶ人も多いたっていうことを言ってたので、早いうちからたくさん選択肢があるんだよっていうのと、現実を見るとなかなか難しいと思うかもしれないんですけど、示してやるのが大切でしょう。

中川委員

勉強が苦手という子どもの中には、もういいわっていう子どももたくさん出てきてしまいます。

兄弟おられるところの保護者の方は、1年生の家庭訪問の時から、聞かれるおうちもあります。

コツコツ勉強していく姿勢であったりとか学ぶ意味に加え、ただ何となく勉強してたら、何となくやめてしまう子もいちゃうので、私らとしたら、せつかくね、行ったところやめてしまうっていうのは、残念だなと思うので、進学のこときちんとした情報の両輪というか、それらをうまく使いながら行きたいなど、こちらもいろいろ試行錯誤というような形なんですけども。

新谷部会長

一時期、カタカナの職業をイメージするというような、ペットトリマーとか、ヘアデザイナーとか、それで、もう私は進路を決めたからいいわっていうことを高校1年生の段階で言ってしまっただけで、狭き道だったりとか、挫折したみたいなことがあって。最近なら声優とかね。

上甲委員

声優は女の子に多いですね。

片山副部会長

あと、ユーチューバーとか。

新谷部会長

最近は多いかもしれないですね。

上甲委員

ゲームデザイナーとか。

新谷部会長

1回、地元の市町村の小学校にアメリカの方がこられたときに、どんな進路指導をするのと聞くと、向こうはポートフォリオみたいなものを作ると言っていました。

株式のポートフォリオがあって、ハイリスクハイリターンで、進路っていうのはいくつかある。あなたバスケットボール選手になりたいのか、でもそれってハイリスクハイリターンだよ。じゃあローリスクローリターンはっていったら、なんかガソリンスタンドでバイトみたいな。で他にもいくつか選択肢あるよね。ハイリスクでローリターンのものであったりとか、ローリスクでハイリターンのももあるよね、いくつか持っといたほうがいいよ、みたいなことをいうんですよ、とか言っていました。

さて、残り時間も少なくなってきましたが、先ほど私も初めて知ったのですが、門真市の奨学金制度があったんですね。奨学金制度私の大学でもありませんけども、ほとんどの学生は認知してないですよ。受け入れる教員側もなかなか認知しづらいんですけど、その辺どうですか。

中川委員

私は進路担当なので、もちろん知ってはいるんですけど、門真市は給付型で行ってくれて大変ありがたいです。

新谷部会長

そうですね。給付型というのはすごいですよね。

中川委員

さらに、数年前に、受給できる人数を増やしていただいているので、大変助かってはいます。

新谷部会長

受け入れる人数は30名前後で推移しててもいいんですけど、申請する生徒が少なくなっていますね。

これは、最初の段階で、申請をこれではできないよってセーブをかけたのか、申請の手間の割にはメリットがないから申請しなくなったのか。その辺がちょっと難しいですね。

中川委員

先程の話で、家庭の収入の基準が、大阪の私立の授業料とかでもそうですが、そういうのもあるのかなあと言うのもわかったんですけど、後は動機を1行しか書けなかったり、1・2行で意欲が伝わらないけど、本当に経済的にしんどくて学力がしんどい子を救ってあげなあかんのかなって言われると、そこでそのね、1行2行しか書けないけど、どうなんやろなっていうのがちょっと、引っかかっているところです。

ただ、貴重な税金ですから、誰でも給付しますというのは問題だと思います。遊びに使われたら困りますし、なかなか難しいなあと思いながら、実際に、「この高校で、すごいクラブ頑張りたいねん」と言って、自己申告書というものを公立高校に出さなければならないのですが、熱く書いて、結構厳しかったんですけど、がんばるからって言って、ほんまに頑張っ合格した子がいるんですけど、でもやっぱり高校に入って聞くと「クラブやってるん？」て聞いたら、「いや先生、やっぱりバイトして家に入れな、ちょっときついわ」って。なんかクラブすると、クラブするので、やっぱり道具のお金がかかったりとか遠征のお金があったりとかという中で、やっぱり凄くなくて、あんなに頑張っ、中学校の時もクラブで輝いてた子なので、なんか、本当に、どう声かけたらいいのかなあというのもあるので、そういう子どもたちは、その高校の制度ちゃんと知ってたのかなとドキドキするような状況でした。できるだけ、手を差し伸べてやらなければならない子どもに、制度がどう浸透し、どう支給してあげれるかって言うのも、私らも一緒になって、もっと真剣に考えなければならぬと感じました。

新谷部会長

今クラブの話が出たのですが、門真市奨学金は、親御さんとかが他の市とかに住んでたら、使えるんですけど。

上甲委員

これは門真市在住ですね。

事務局（寺西教育部総括参事）

そうですね。門真市に子どもも親も住民票があるということが条件となって

おります。ですから、例えば奈良の私立高校に行った子どもは通えるから良いのですが、青森に行ってしまうと、寮に入りとなると住民票を移す必要があり、現在のところ受給資格を満たさなくなってしまう。

新谷部会長

なるほど。

川村委員

府から出てても、家から通ってたら、申請が降りるけど。

事務局（寺西教育部総括参事）

住民票があればいいんですけど。通える範囲の子は住民票が動かないと。

川村委員

近隣はね、京都やら。奈良やら。

上甲委員

たまに野球やサッカーやらで、強豪校に行って他府県に行って、寮に入って、高校に行っているような子どもたちが申請できないということがあるので、そのあたりは改善の余地があるという気がしますね。

私も応募者が少ないので、毎年、この案内が教育委員会から来て、3年生全員分を刷って、配って、それもただ配るのではなく、担任から丁寧に説明させています。それでも、応募が少なかったら学校便りにまで書いて、もう1回説明するように言っています。3年生は学年だよりも掲載しますが、私が学校便りに掲載するので1・2年生保護者も知ることになります。門真市はこのような奨学金事業を行っているんだということを知ってほしいし、そのために何度も周知していても、応募が少ないのです。

それは、子どものところまで止まっているのか、親が見たとしても、きちんとは見えていないのか、必要ないと思っておられるのか。

片山副部会長

最初から諦めている部分もあると思います。

新谷部会長。

あきらめですか。

上甲委員

それは収入の部分で。

片山副部長

はい、世帯収入の制限が厳しいからです。ちょうど私も、当時、上の子が中学三年生の時に、奨学金の応募を考えたのですが、共働きなので収入が制限を超えてしまうことがわかり諦めました。他にも、そういう方が結構おられると思います。

また、世帯収入の制限はクリアしていても、子どもの学力が低く、審査で落とされると思い、諦めてしまうパターンもあると思います。

2年前は奨学金の申請者が75人で受給者が31人、これはおそらく、ダメ元で申請してみたものの、やはり審査で落とされたっていうことでしょう。最近では38人が申請し36人が受給している。これは、ある程度合格ラインの見当がついてきたため、それに相当する人だけが応募していると考えるのが妥当だと思います。ほぼ確実な方しか応募していないのだと思います。

新谷部長

なるほどなるほど。そうですか。

片山副部長

あと、申請が中学三年時でしかないため、高校一年または二年で、極端に世帯収入が下がってしまっても申請できないことになっています。ここもどうにかしてもらえれば、応募者が増えると考えますが。

新谷部長

途中でもう一回審査があるっていうか。

片山副部長

高校進学後は申請できません。

上甲委員

途中からという事ですね。

片山副部長

そうなんです。

上甲委員

入ってから経済状況が変わって、高二から受けたいとかっていうのはできないという事ですね。

片山副部長

はい。また、中学三年時の前年の世帯収入を審査されるので、中学二年時に収入が制限を超えていた場合、中学三年時に何らかの事情で収入が極端に減ったとしても、対象外になります。

新谷部長

認定が高い。

片山副部長

そうなんです。

上甲委員

タイムリーな状況じゃないっていう事ですね。

片山副部長

高校進学時の世帯収入を当て込んで私立高校に行かせた場合、その後で収入が減ったときは厳しいです。

新谷部長

ああそうか、そっちの方がしんどいですね。

片山副部長

そうなんです。

上甲委員

途中で変わるとしんどいですね。

片山副部長

今は、府の授業料減免措置があるので、なんとか私立高校に行かせることができても、世帯収入が極端に下がった家庭の子どもに対するシワ寄せは大きいと思います。

新谷部会長

かなり大きいですね。なるほど。

中川委員

現に、それで私立行った子が、転学で、公立に行って行った子も、何年前にうちにもいましたので。

片山副部会長

そうなんですね。

川村委員

ひょっとしたらやめてしまいますよね。

片山副部会長

そう思います。

川村委員

家のために働かないとみたいなね。

中川委員

やっぱりその時は中学校に来てくれるので、話して、何とかやっぱりね、「高卒の資格を取ろうや」って言って、本人も結構勉強がんばる子やったので、「わかった」みたいないうことで、「バイトしながらでも行ける学校を考える」とかみたいなことを言ってやりましたけども。

新谷部会長

正直これもらって、忙しい中読めるかって言ったらなかなか難しいなって。

上甲委員

最低限の事は書いてあるかもしれませんが。

川村委員

大半は多分子どもで止まっていると思います。

上甲委員

止まっているんでしょうね。

新谷部会長

これ何か、スクールソーシャルワーカーみたいな人が、申請の手伝いとか、それこそレポート作成、思いはあって口では言えるけど、文章書けない子どもとかいると思うんですけど、それとか、そもそも外国籍で日本語が不自由な家庭もいると思うんですけど、スクールソーシャルワーカーってその辺のサポートをされたりするんですかね。こういう申請書類とかでサポートとかが、されるんですか、スクールソーシャルワーカーは。

事務局（寺西教育部総括参事）

スクールソーシャルワーカーはしませんね。ただ、この10月から市のこども部が子どもの応援ネットワーク事業を始め、元教員の推進員さんが10名以上配置されましたので、こうした方々が支援して下さると進むのかなとも思います。

新谷部会長

ああそうですか。

事務局（寺西教育部総括参事）

あと今出た面接なんですけど、私たちは面接を通して向学心を見て、受給の諾否を決めていますけど、面接は進学後の5月ごろです。

例えば青森の学校に行った生徒が面接のために門真市まで来るとなると、かなりの交通費がかかります。門真市奨学金は年間6万円ですから、そのために交通費が高ければ生徒にとっては負担です。面接は休日に行いますが、部活動はやすまなければならない。

また、先ほど言われていましたように、中三の2月から、2月1日から2月25日は申請期日で、進学後が申請できませんが、たまに問い合わせとしてね、高一なんですけども、もらえませんかって言われます。

そのような声にこたえようとすれば、他府県の学校に行った生徒にも門戸を開く、また、進学後も門戸を開くことにはなりますが、そうすると毎年、全学年の生徒を面接することになります。

その時間設定や他府県から帰ってきてもらわなくてはならないという課題もあり、今でも30数人の面接を、私たち事務局3人1組で、休日に教育センターの3教室で行っていますが、それが3学年分となるとなかなか難しい問題も出てくるでしょう。

とは言え、貴重な税金を原資とした奨学金ですから、誰にでも給付するとは言えません。やはり、向学心に富む生徒に給付してあげたいという核の部分

いかに担保するかを考える必要もあるとは思いますが。

ただ、今、委員の皆様方のご意見をしっかりと受け止めて考えていく必要もあります。その際には、面接等の向学心を見る方法等々の改善が必要となってくると思います。

川村委員

それなら、学校推薦みたいなのもいいかもしれないですね。先生が言うみたいなのにこの子は本当に熱い思いがあるっていう子は、面接がなくても大丈夫でしょう。

中川委員

あと、先程申し上げた作文の指導と言うのはどうでしょう。去年うちもやりましたけども。

新谷部会長

あーそうですか。

中川委員

3年の国語科の先生が作文指導をしっかりとやってくれました。そっちもやっぱり、その子にとっては大切なことなので。

新谷部会長

先生大変だったと思います。

事務局（寺西教育部総括参事）

それが今度高校になった時に、その中学の先生がいなくて、1人でレポートや、アンケートを出せるかという問題もありますが、そこは高校で学んでさらに力をつけて行ってほしいですね。

新谷部会長

ただ、高校1年ぐらいは一緒にサポートしてくれる人がいてくれないと、僕高校1年生の時に自分でそんな書類を出す自信がないと思うんで。

上甲委員

そんなに複雑じゃないんですけどね。

新谷部会長

ああそうですか。わかりました。えーと、10分でまとめるんですね。

中野課長

そうですね。まとめに入っていて4時10分でこの場を終えて、15分から全体会となります。

新谷部会長

わかりました。ではお手数ですが、ちょっとお二人同士で、どんな話があったのかちょっと簡単にまとめていただいて、それをもとに、覚えている事だけで結構です、覚えている事だけで。大体僕メモしてますんで大丈夫です。はい。覚えていることが意味があることだと思うので。どうぞお願いします。

<話し合い>

新谷部会長

何か皆さん、まとめの話の方がすごい面白い話がいっぱい出てきて、面白いなど。

何か、どんな話が、特に多分一番とかの方がよく話されていたと思うんですけど、どんなまとめ方になりましたか。

片山副部会長

やはり、大阪府と比較して、門真市の子どもは頼れる人が誰もいないとか、わからないと答えている数字が大きいのがショックで、衝撃的な内容のアンケート結果でした。頼るにしても、親や先生というのは、どうも忙しそうに見えて相談しにくいと感じているのではないかなと思います。ですので、大学生とか親身になって話を聞いてくれる人、相談に乗ってもらえるような人が近くにいれば、また状況が変わってくるのかなと思います。

新谷部会長

はい、ありがとうございます、こちらはいかがでしょうか。

上甲委員

地域とのつながりっていうのはなかなか難しいなあっていう話から、地域人材の活用の仕方ってどんな形があるのだろうという話をしました。

後は進学に関して言えば、大学進学などの意識向上にむけ、身近にモデルに

なるような人材がね、触れ合える機会が門真の子どもには少ないだろうから、そこをどうするかといった話とか、進学フェアの取組の意義などについて話をさせてもらいました。

新谷部会長

はい、ありがとうございます。では意見を頂きまして、うまくまとめて頂いてありがとうございました。活発な議論ありがとうございました。